

## アコマ医科工業株式会社

意匠の中の特許性に気づくなど  
知財への意識を高め人材育成も推進

1921年(大正10年)の創業以来、医療現場の多様なニーズに応える機器を製造・販売。日本初となるアネロイド血圧計や麻酔器と呼吸器を合体させた「アネスピレータ<sup>®</sup>」の独自開発など、先進機能を搭載した製品によって、世界の人々の健康で豊かな生活に貢献。さらには動物医療の分野においても高品質な製品を提供するなど、多くの大切な生命を見つめ続けている。

## 主な権利

2017年：特許 第6093081号  
2017年：特許 第6100429号  
2017年：特許 第6173408号  
2017年：意匠登録 第1586431号  
2017年：商標登録 第5991093号

## 会社概要

所在地：東京都文京区本郷 2-14-14  
電話：03-3811-4151  
URL：https://www.acoma.com  
業種：医療機器の製造・販売  
設立：1921年(大正10年)  
資本金：1,000万円



知的財産部 部長：沖田 一成さん

日本発の医療機器メーカー  
信念と誇りを胸に歩み続ける

創業は大正時代。創業者の安藤駒太郎が掲げた「医療器械は人の命にかかわる大切なものであるから不正なものを販売してはならぬ」という教訓に基づき、多くの人々の健康や幸福に役立つ製品を作り続けてきたアコマ医科工業株式会社。日進月歩の医療の世界において、全身麻酔システムをはじめ、人工呼吸器、電気メス、吸引器、血圧計などの製造・販売を行っている。

そこには、Made in Japan の信念と誇りがある。国産の機器を、日本の医療現場に届けたいという想いを大切にしながら、強力な海外勢を相手に奮闘。長期にわたって国内医療機器メーカーの中でもトップクラスの地位を確保してきた努力は、並大抵のものではないだろう。

そんな同社であるが、以前は知財に対する意識が高い訳ではなく、理解も十分ではなかったという。

各種セミナーの機会を  
積極的に活用し知識を高めた

研究開発部の部長であった沖田氏は、現在は知的財産部の部長も兼任している。しかし、以前から知財に対する社内体制が確立していた訳ではなかった。知財を考えるきっかけについて、沖田氏はこう語る。「かなり前に、自社製品に採用している機構について『もしかしたら特許の侵害ではないか?』との問い合わせが外部からあり、慌てて調査を行いました。この時に、事前調査の甘さを思い知らされました。幸いなことに侵害はなかったのですが、今から考えると権利化していなかったことにも問題があったのではないかと後悔しています」

そんな出来事もあって、知財に関する知識を少しでも得たいと考えた沖田氏。WEBを検索しているうちに、知財センターのことを知った。そして2012年頃から、公社や知財センター主催の各種セミナーに片っ端から参加するようになった。「無料なので行きやすかった」という理由も

あったようだ。

それから間もなく、海外における麻酔器の商標出願について、知財センターに相談。その機会にアドバイザーから支援事業や助成金などの説明を受けた。ニッチトップ育成支援を受けたのは2014年から。知財の重要性を改めて認識し、会社全体での取り組みが急務だと考え、知的財産部を新設した。現在は3名体制となり、その役割がより強化されている。

学んだ成果を試した社員が  
知的財産管理技能検定に合格

沖田氏が知財センターのサポートとともに手掛けたのは、まずは社内に知財というものを周知することだった。「経営陣をはじめ、工場や開発部門も対象に、セミナーを何度も開催してもらいました。おかげさまで知財に関する認知度が高まり、社内の各部門からは『こういう図面を業者に出したいけれど、秘密保持契約はどうしたらいいでしょうか』など、各種技術契約書、特許侵害・回避などの技



電子制御によってさらに高度な麻酔を実現した「アコマ麻酔システム PRO-NEXT+i」



吸入麻酔薬を蒸発させる「アコマ気化器 MK-5s」。気化器もさらなる進化へと向かっている。



多機能でコンパクトな「アコマ動物用人工呼吸器 Spiritus」。動物医療の分野でも、先進機能と使いやすさを兼ね備えた機器を提供している。

術的な相談も多く持ち込まれるようになりましたね。何十ページもある海外メーカーとの契約書についても、担当者を交えて検討しながら、実務を通じたレベルアップを図ることができました」

こうした知財セミナーの成果を確認する目的で、研究開発部の有志5名が知的財産管理技能検定の3級を受験。全員が合格を果たした。その後も継続して受験者を増やし、知識レベルの底上げを行うことによって、多くの社員が製品の構想段階からしっかり知財を意識できるようになったという。

特許か意匠か部分意匠か  
使い分ける判断もかなり重要

知財を考える上で大切なポイントについて、沖田氏に尋ねてみた。「まずは自社で発明したアイデアであることを、しっかりと主張できるように権利化することです。また、他社との共同開発においては、時間が経つと発明者が誰であるか記憶があいまいになってしまう場合があり

ます。その都度、明確に記録しておくことが重要になりますね」

知財センターのアドバイザーについては、「素人同然の相談にも親身に乘ってもらい、非常に助かっています。また、内容に応じて弁護士・弁理士の先生にご同席いただきながら具体的なアドバイスを受けられるのも心強いです」とのこと。特許と意匠との使い分けなども大きなポイントであり、部分意匠も含めた取得に向け戦略を立てる際の相談には、意匠に強い弁理士が同席。「こちらが意匠と考えていた中で『この部分には特許性があるのではないですか?』というアドバイスもあり、気づかなかった点にも目を向けることができました」。こうした取り組みによって、かなり深く実務を習得することができたという。

創業100周年の先も見据えて  
後継者の育成にも努める

「特許が権利化されていないか事前に調査することも、単なるリスク管理ではありません。調べることでいろいろなものが見えてきて、新しいアイデアを思いついたりするからです」と沖田氏は語る。

しかし知財発掘や有益な情報の共有はまだ不十分であり、今後は充実させていきたいという。また、外国特許の調査は言語面で難しさが伴い、翻訳サービスなどを利用してなんとか対応しているとのこと。苦労も多いが未来を見据えている。

2021年には創業100周年を迎える同社において、知財戦略は一つの羅針盤になりそうだ。後継者の育成にも努めたいと語る沖田氏の明るい笑顔が印象的だった。

知財  
センター  
から

## 知財のアイデアを見つけるための「気づき」は重要

知財担当者の熱意が大きな力となり、会社全体で知財のレベルアップにつながったと感じます。特許に限らず意匠でも権利化を意識するなど、製品や技術に見合った形で権利取得をめざしました。麻酔器だけでなく、その周辺機器でも知財のアイデアが出てくるようになったというのは喜ばしいことです。 担当：秋葉原 阿部雅樹アドバイザー